

ワイカト大学(2024年度夏期)

ニュージーランドで実体験した愛ある出来事

サービス創造学部 高松あのみ

私は8月30日から9月22日までの3週間、ニュージーランドに語学研修へ行った。そこでは、想像の何十倍もの世界や出来事が待っており、とても濃く暖かい時間を過ごすことができた。海外短期文化研修を通じて自身が学び得たものとして、地域文化・生活、大学、コミュニケーション、自分自身の価値観、について述べていく。

【はじめに】

私が今回ワイカト大学の語学研修を志望したきっかけは、前回ホームステイ型の語学研修に参加した友人が書いたレポートを読んで、楽しい事だけでは無く辛いことや悔しい経験をしたことから、なりたい自分に成長することができたという事を知った。日本に帰ってきた際の友人の考え方やマインドが変わって、自分の芯を持ち思考力が深まった友人を実際に見聞きし、私はとても感銘を受け自分もそうなりたいと思うようになったからである。

また、幼少期からディズニーに関わる仕事に就きたいという私の将来の夢を叶えるために英語への苦手意識を無くしたいと考えていた。自分の言動や行動でハピネスを創造し、良い影響を生むことができる人材になるという事を芯に様々な事に挑戦してきた。そのためには自分で提供するための語学力も必要になることから、幼少期から英会話に通っていた。高校2年生まで習っていたが、書くことも聞くこともとても苦手で半分諦めていた。負けず嫌いな性格上、長年習っても力にできない自分が嫌だったが、環境から変えることができるホームステイ型の語学研修は、昔の自分を変えるチャンスであり、なりたい自分に近づくことができる最高の環境だと言える。

私は3年生での参加という事で、周りの友人は就活中であり焦りや不安がある中参加を決めた。それは、研修先の文化や習慣を学ぶことで自分の価値観が広がるであろうことを確信しており、語学研修に行かなかった自分と行った自分を想像したときに絶対に後悔すると思ったからである。

【地域文化・生活について】

今回私を受け入れてくれた家族は、ホストファザーとホストマザーと男の子1人女の子2人の計5人家族だ。ホームステイの感想を端的に表すと”自由に暮らすことができた”ということだ。自分専用の小屋や、家の鍵を貰えたことに加え、シャワー・洗濯は自分のタイミングで良いと言われた。ニュージーランドではお湯が貴重で毎日入らない家庭もあるなかで、制限時間も無く自由に使わせてもらっていた。だが、10分程度であがれるように心がけ、お風呂の前には「お風呂借りるね。」、後には「お風呂貸してくれてありがとう。」と毎日伝えた。また、私は家から学校までとても離れており1時間かけてバスで通っていた。日本のバスや電車のように時間通りには来ないため乗り換えにとっても苦戦していたところ、ホストマザーは常に気にかけて、「心配はいらないよ。幼稚園の送迎のついでに今から迎えに行くよ。」とコミュニケーションを取ってくれたため、不安なことや心配な事があってもすぐ解決できる環境であった。休日や放課後には家族でお出かけに連れて行ってくれたり、祖父母の家に招待してくれたり、誕生日パーティに参加させてくれた。毎日が新鮮でどんどん仲良くなれてストレスのない生活を過ごすことが

できた。

その生活の中に無くてはならない存在だったのは子供達である。女の子2人は3歳と4歳だったため、とても元気でかわいく、常に私を取り合っていた。朝起きると一番に名前を呼んで駆け寄ってきて、朝ご飯のお手伝いをしてくれた。そして寝る直前まで私と会話をしてくれたり、ボール遊びをしたり、好きなアニメを見せてくれた。8歳のお兄ちゃんは常に妹を気遣っており、子供たちが何を伝えたいのかわからなくて困っている際に、簡単な英語に変換して教えてくれた。また、いろんなスポーツを教えてくれて、小学校の学習発表会に招待してくれた。このことから1ミリとも寂しさは感じず楽しい日々を過ごすことが出来た。ホストファミリーと会話を頻繁にとったことにより、行きの飛行機のアナウンスはあまり聞き取れなかったが、帰りの飛行機のアナウンスは聞き取り意味も理解する事ができた。研修後に行った TOEIC では 100 点あげることができ、語学力の向上を感じた。

【大学について】

今回のプログラムには日本人が多く参加しており、私のクラスには福井の学生と大阪の学生と新潟の学生も参加していて、他県の学生と交流することが出来た。レベルごとにクラスが分けられ、同レベルのクラスが2つに分けられ私のクラスは学生同士で会話を多く取る授業形態だった。自由に発言し先生に指名されたら一人が答える形だったため、毎日4回は発言することができ、間違えても否定することなく優しくヒントを教えてくれたため、前向きに挑戦する事ができた。授業の他にも放課後にワイカト大学の学生と交流する機会が滞在中に何度かあり、特にトレジャーハントでは現地の学生が大学内を案内してくれて、ニュージーランドの有名な所やおすすめのお店などを知ることができ、現地の学生の友達を作ることが出来た。また、日本語授業のボランティアとして授業に参加した際には、高難易度と言われている日本語を一生懸命学んでいる生徒と実際にアクティビティをした。自ら発言に挑戦している姿を見て、私ももっと頑張ろうと思うことができた。振り返るとこの時間が私の中で1番楽しい国際交流の時間だった。

大学の敷地は一般開放されておりさまざまな人が大学の施設を利用していた。大学内にはカフェやフードコート、日本食屋、薬局、古着屋があり、老若男女を問わず多くの人があった。ここにも日本にはない自由さを感じた。特に Kingitanga Day (キングタンガ・デー) というマオリのイベントの日は多くの人々が大学を訪れ、マオリの伝統食を食べたり伝統物を作ったりすることができ、とても賑やかで印象に残っている。

【コミュニケーションについて】

短期間で感じた現地の人々の価値観や自分の中で変化した感情がある。ニュージーランドでは18時にお店が閉まり、20時頃には就寝する。そう考えると日本はとてもブラックだと感じた。朝ご飯は自由でお昼と夜はホストファザーが作ってくれたご飯を18時頃にみんなで食べる。ホームステイ先の家族や大学の先生など多くの人と会話する機会があったが多くの人が会話にジョークや素敵な言い回しを交えたユーモアのある会話をしてくれた。日本人からは感じる事が無い独特の雰囲気や余裕を感じる事ができた。例えば、お店で洋服を買った際に、「その服すごく良いね。」と伝えてくれた。合っても無くても良い言葉ではあるが、一言伝えて貰っただけでとても嬉しい気持ちになる。また、会話の最後やその場を離れる際に「楽しんでね。」や「良い一日にしてね。」と伝えてくれる。この言葉を当たり前のように伝えられる心の広さやユーモアを感じた。この心の広さは時間に追われながら生活する日本人と双極的だと考える。日本人は5分前行動が当たり前の習慣になっているが、ニュージーランドではそれを感じる場面が一度もな

く、時間に縛られずに生活する人々を目の当たりにして時間への価値観が大きく異なることを知った。

また、ニュージーランドは異国民が多く、多くの人種が住んでいる。様々な見た目、生活方法、言葉などからより自由さを感じた。自分を認め相手も認めるという精神が生活の中から伝わり、人種差別を感じることは一度も無かった。私はチアを17年間続けており、現地のダンススタジオで踊りたいと思い、友人のホストファミリーにお願いをして現地のジャズダンスレッスンに参加した。その際に急な参加だったにもかかわらず、とてもフレンドリーに暖かく受け入れてくれて、言語や人種が異なってもダンスで繋がるのができたことと実感した経験だった。

日本で育った私からすると違和感を覚えることだらけの3週間だったが、カルチャーショックと同時にとても羨ましいと感じ、これを生で感じるのができたことを改めて貴重な体験だったと振り返る。

【自分自身の価値観について】

今回のプログラムは3週間と短期間であったが、短期間だからこそ毎日を充実させることが出来たと考える。これまでの当たり前が一步外に踏み出すと、当たり前ではなくなること、事前にインターネットで調べていても現地体験するとカルチャーショックを受けたことなど、実際に訪れて五感で感じなければ分からないことだらけだった。以上で述べたコミュニケーションの大切さや、文化や生活の違い、心の広さを吸収し、自分を認め愛し、他人を認め愛せる深い人間になりたい。人によって海外に対して不安要素はあるかもしれないが、学生の貴重な時間だからこそ勇気を出して行動することで刺激を受けることが数多くあると確信した。初めての海外で初めての語学研修地が、素敵が詰ったニュージーランドで本当に良かった。

【終わりに】

文化や言葉など違うものはあるが、それを越えて共通するものがたくさんある。もっと英語を話せて聞けるようになるためにまだまだ勉強するとともに、第二の家族が日本に遊びに来たときには次は私が日本の生活や良さを伝えていけたらと思う。また私には大学の卒業旅行で海外に行くという一つの目標がある。今は言語の壁や治安の壁など不安要素が多く心から楽しめるか不安であった。だが語学研修で得た経験や考え方を活かし、苦手意識や様々な壁を無くし、一生に一度しかない卒業旅行を最高の思い出にしたい。

最後に、日本大学生22名をニュージーランドのワイカト大学へ招待して下さった皆様方、ご支援下さった関係者の皆様、一緒に語学研修に参加したメンバー、そして私の家族に深く感謝する。そして、さまざまな文化にこれからも積極的に触れていき私からも魅力を周りに発信していける愛のある深い人間になりたい。

